
罪深く悩み多き我等

悠羽

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

罪深く悩み多き我等

【Nコード】

N5161Z

【作者名】

悠羽

【あらすじ】

銀時と土方。

短(?) 編集

BLですよ。

夢で逢えたら（前書き）

受け攻めは固定していません。

作者のノリとテンションにより設定変わります。

夢で逢えたら

- 夢で逢えたら -

原作設定

もう付き合ってます

「何がそんなに気に入らねえってんだこのクソ天パあ！ふざけんなっ！俺はもう帰るからな！」

「ああ帰れ帰れ！清々すらあニコマヨラあ！」

そう言っただけでケンカしたのは今日の昼下がり。

きっかけは些細な事だったのに、そこは素直じゃない二人の事。

売り言葉に買い言葉でとうとう土方は帰ってしまった。

そんな今日のやり取りを思い出しながら

「けどよあ…、何もホントに帰る事無いじゃん」

土方君よお

と呟いても差し込む夕日に吸い込まれて。

ソファでゴロゴロ寝返りを打ちながら考える事は土方の事ばかり。

ああダメだ。こんなんじゃ何かダメだ。

「ま、過ぎた事はしょうがないってか」

まるで自分に言い聞かせるように口に出し、俺は万事屋を後にした。

「あゝ、ちょっと飲み過ぎたんじゃねえの？」

万事屋を後にした俺は一人で飲みに出掛けたのだが、飲んでも飲んでも考えるのは土方の事ばかり。

千鳥足で家路を辿る間に考えるのもやっぱり土方の事。

…やっぱ今日のは俺が悪かったよなあ…

きっかけはホント些細な事。

たまたま街で見掛けた土方君が、沖田君の頭を撫でていただけ。

柔らかな笑顔で。

まあ土方からしたら沖田君は弟みたいなもんなんだろうけど…

あんな顔見れんのは俺だけだと思ってたんだけどなあ…

そしてその後万事屋に顔を出した土方に理由も言わず八つ当たりして…

うん、やっぱり俺だわ。悪いの。

でも謝んのはなあ…

何て考えてながら階段を昇ると

「にゃあ」

玄関の前に

黒い塊がいた。

何だこりゃと近づいて良く良く見てみると

「にゃあ」

真っ黒い子猫だった。

「何？お前俺に飼われたいの？ダメダメ。ウチには育ち盛りの犬と小娘がいるんだから」

そう言いながら玄関を開けると

「にい」

俺の足元をすり抜けて家の中へ入って行ってしまった。

「ちょっともうダメって言ってんじゃん」

なんて言いながら子猫を抱き抱えると

真っ黒で艶々の毛並、シャープな体つき、刃色の瞳

…なんか土方みたい。

一度そう思ってしまったらもう土方にしか見えず。

しかもいつの間にか土方の定位置にちょこんと座ってるし。

「……土方……？」

「にゃあ」

「……んな訳やねえよなあ」

あゝ、俺相当酔ってるわ。

頭をがしがし搔いて風呂の準備に向かった。

風呂の湯が溜まる間に子猫にミルクをやってみた。

「うまいかあ？」

子猫はチラリと此方を見て、またミルクを舐めている。

その様を眺めていると自然に頬が緩む。

可愛いなあ、おい。

今日は神楽も定春も居ねえし、

「しゃあねえから一晩泊めてやるよ」

「ちょ、コラ暴れんたって!」

折角だから洗ってやろうと一緒に風呂に入っただいいのだが

「ぶにゃああ!」

やっぱり水は嫌いなのか震えるし逃げ回るし。

「お前洗わせねえと一緒に布団入れてやんねえぞおお!」

堪り兼ねて怒鳴ったら急に大人しくなりやがった。

その隙に体を洗ってやり、一緒に湯船に浸かる。

「そうだ、一晩とはいえお前に名前付けてやるよ」

うーん、タメゴロウ？黒いからクロ？それともタマ？

……トシ……とか？

「……トシ……？」

恐る恐る呼んでみる。

「にい？」

普段は恥ずかしくて呼べない名前を付けちゃった。

「トシ」

「にゃあ」

「トシ」

「にゃあ」

ここぞとばかりに呼んでみる。

「……土方……」

トシは首を傾げて俺を見ている。

アイツは、土方はまだ怒ってるかな？

「土方：今日は俺が悪かったよ。」

「にい」

「なぐんで、お前に言ってもしやあないか」

さ、上がるぞ

と俺はトシと風呂を出た。

風呂から上がり、トシをドライヤーで乾かしていると、

「あ、」

そうだ

急に思い付いて机の引き出しを開けた。

中から取り出したのは、鈴。

下のババアが温泉行った時の土産のキーホルダーだ。

「トシ、じつとしてるよ」

その鈴を紺色のリボンに通し、首に結んでやる。

「おお、お前似合うじゃん」

頭を撫でてやると、喉をゴロゴロ鳴らし擦り寄ってきた。

「アイツもお前みたいに素直だったらなあ。まあ素直じゃねえのはお互い様なんだがよ。」

「にゃあ」

「何て言うか…俺はつか好きなんじゃないかって、土方にとって俺は別に特別でも何でもなくて…何て考えたりさ、しちゃう訳よ。」

「にい？」

「やっぱ俺、相当土方が好きなんだろうなあ。まあ絶対本人には言えねえけど。」

トシの頭を撫でながら苦笑い。

「あゝあ、アイツもトシって呼んでみてえよ。んでもって銀時、なんて呼ばれてえよ。」

ま、無理な話だろうがな。

「ホントは俺ももっと素直になりてえんだよ」

ホント、いつの間にこんなに惚れちまっただろう。

「…苦しいよ。好きなんだよ…」

何時から俺はこんな女々しくなっただろう。

「全部お前のせいだからな…土方…」

「にゃあ」

土方にもこんな風に言えたらいいのに。

トシが土方だったらいいのに。

「も、寝ようか」

どんどん切なくなってきた俺は、トシを抱き締めて布団に入った

夢を見た。

トシが土方の声で喋っていた。

俺の頬を舐めながら銀時、銀時って何度も。

それはとても優しい声で。

舐める度に首の鈴がチリンと鳴って、舌がくすぐったくて、そしてとても嬉しかった。

「トシ…」

「お前えらモタモタしてんじゃねえっ！」

「裏だ！裏へ回り込め！」

窓から聞こえる物騒な声に目を開けると、外はもう明るかった。

「桂ああ！今日こそは逃がさねぞ！」

よろりと起き上がり窓から覗けば、黒い集団が捕物帖を繰り広げていた。

そして先頭で指揮をとる愛しい人。

頼杖について暫く眺めて、はっと気が付いた。

「そうだ、トシは？」

布団を捲つても、ソファの上にも何処にも居なかった。

「トシ…」

きつと空いていた窓から出て行ってしまったのだろう。

「ま、元々一晩の約束だしな」

一抹の寂しさを振り払う様に言い、もう一度布団へ潜り込んだ。

ジリリリン…ジリリリン…

次に目を開けるともう夕方だった。

無理矢理体を起こし、受話器を取る。

「はい、万事屋銀ちゃんです」

『今日アネゴが焼き焼き食べに連れてくってゆーから今夜も帰らないネ』

それだけ言っと切れてしまった。

「そうかあ…今夜も一人かあ」

また飲みに行くかなあ。

なんて受話器を持ったままぼんやり考えていると

「なんだ、今日はチャイナは居ないのか」

急に後ろから声がして

「っ！」

慌てて振り返ると

「チャイナの癖に気が利いてるじゃねえか」

玄関に寄り掛かり、ニヤリと笑う土方が。

「土方…」

びっくりして言葉が続かない俺に、土方はこう言った。

「ああ？土方あ？トシって呼べよ。…昨夜みてえによ」

な、銀時

何時もより少し優しく笑う土方の刀には、紺色のリボンで結ばれた鈴が光っていた。

ある朝の会話

- ある朝の会話 -

「ねえ、」

まだ薄暗い朝方の安宿。

布団の中の俺は、見慣れた隊服に袖を通す土方に声を掛けた。

「ああ？」

支度する手は止めず、土方はチラリと此方を見た。

「ねえ、俺達ってどーゆーカンケイ？」

「は？何言つてんだ？てめえ」

慣れた手付きでスカーフを巻きながら返される。

だけど俺は更に聞いてみる。

「カラダだけ？ 爛れたオトナのカンケイ？」

土方は黙々と支度を続けている。

何となくカラダを重ねる様になって早半年。

週に3日の時もあれば2週間連絡無しの事もある。

その間、付き合うとか、そんな話になつた事はない。

ただ逢つて、抱いて抱かれるだけ。

「ただの性欲処理？」

更に俺は続ける。

だつてこれ以上はもう無理。

気付いちゃったんだよ、自分の気持ちに。

「それとも暇つぶし？」

「じゃあアレだ。何かの罰ゲームとか？」

ヤバイ

自分で言ってる癖に泣きそうだ。

泣いてるなんてバレたくなくて俯いていると、

「バカかテメーは」

ため息混じりの声がした。

「だよーねー。何の意味も無い事なのにねー」

少し震える声で答えて、それでも顔を上げられずにいる俺に土方は告げた。

「…何でその中に『俺がテメーを好きだから』って選択肢がねーんだよ」

好き？誰が？誰を？

えええっ？

ハッとして顔を上げると、土方は準備を終え出ていく所だった。

「今夜、行くから予定開けとけ」

そう言っ出ていく土方の頬は少し赤かった。

その後ろ姿を暫く眺めて、またもそそと布団に潜り、漸く俺は理解した。

『ひょっとして…これって告白ってヤツうつ！？』

マジで？

期待しちゃうよ？

あー、銀さんニヤけちゃうんですけどぉ！

そして俺はいそいそと万事屋へ戻り、土方の為にマヨネーズ料理を作ろうかなんて考えるのだった。

路地裏の悲劇

- 路地裏の悲劇 -

がさり…

身を隠している植木が思いの外大きな音を立て、心臓がどきりと鳴る。

気付かれたのではないかと標的を見れば、

「あら、パー子じゃない」

見た事無いようなモンスターに話し掛けられていた。

しかしやけにアゴが特化したモンスターだ。

危険か？

斬るか？

そう迷っているうちに、標的は一言一言モンスターと会話を交わしまた歩き出した。

俺は植木から素早く抜け出し、建物の影から影へ身を隠しながら標的を追った。

静かに、気配を殺しながら影から影へ。

『これじゃ鬼の副長どころか猫の副長じゃねえか』

心の中で呟き、舌打ちする。

ちなみにこれは偵察の仕事ではない。

んなもんは山崎にやらせりゃあいい。

『ああ、何でこんな事になってんだ』

今朝の巡回の途中、前から歩いてる来たアイツを見付けた。

今日こそは想いを告げる。

そんな覚悟で屯所を出てきていた俺は咄嗟に建物の影へ隠れた。

通りすがりを路地裏へ引き込んで告げようと思ったのだ。

しかし俺も気が動転していたのだろっ。

気が付くとアイツは通り過ぎていた。

しまったと思い、何とかチャンスを探いながら後を付け始め、今に至る訳だ。

『しかしホントうろろうフヨフヨしやがってあの天パ』

想い人であるにも関わらず悪態をつく。

『一体何の目的で何処へ向かってんだ。ってか誰だその男！ヤケに親しげじゃねえかあ！あつ、肩なんか組みやがって！俺の銀時から離れるやこのマダオがああ！』

叩つ斬つてやる！

そう思い、刀に手を掛け路地裏から飛び出そうとしたら

ドンッ

何かにぶつかった。

低い姿勢で飛び出した為か、目の前に見えるのは黒いブーツ。

徐々に視線を上げていくと。

白い着流し。

腰に木刀。

この辺から背中をイヤな汗が伝い出した。

片腕を抜いただらしない着こなし。

紅い瞳。

ふわふわの銀色。

「何人の後コソコソ付けてんだ。ストーカーですかコノヤロー」

みつ、見付かったアア！

「あー…いや、その、これはだな」

チクショウ、上手い言い訳が見付かんねえ。

「やっぱストーカーの部下はストーカーですかあ？」

「てめっ、俺を近藤トコナと一緒にすんなああ！」

いや、待てよ十四朗。

これは逆にチャンスじゃないか？

廻りには誰も居ない路地裏。目の前には想い人。

今だ！言っんだ俺！

「あー、俺はただ、お前によお……」

何？という感じで首を傾げ俺を見る銀時。
そんな顔すんな可愛いじゃねえかあ！

「お前に、よ……」

顔が熱くなるのが解る。

やべえ、何て言やぁいいんだ。

何も上手い言葉が見付かんねえ。

銀時は腕を組んで、俺の次の言葉を待っている。

「その、だな…」

あああ、頭の中が真っ白だ。

何でこんな窮地に立たされてんだ。

敵前逃亡は士道不覚悟だと解っている。

だが…だが言えねえ。

たった一言でいいのに。

「っ、何でもねえ」

言うが早いか俺は走り出していた。

「え？おーい大串くん？」

銀時の声が聞こえたが俺の思考回路はもう限界突破。

「今日の事はぜってえ忘れろよおお！この糖尿天パがああ！」

チクショウっ！こんなはずじゃなかったのに！

叫びながら、泣きながら、俺はひたすら逃げた。

おまけ

走り去る土方を俺は暫く眺めていた。

「…何だつてんだ」

頭をぼりぼり搔いて、またふらりふらりと万事屋へ戻る。

アイツが今日言おうとしたことは大体予想は付いてる。

そんなの、毎日アイツを見てたら解る。

ふとした仕草で、目線で。

「ホント、変なところで臆病なんだよなあ、アイツ」

言えればいいのに。

俺はぜってえ断らないからよ。

スノードーム(前書き)

-スノードーム-

スノードーム

さく…さく…さく…

俺はただ、歩いていた。

一面真っ白な世界を。

前を歩く男の白いブラウスが雪に溶け込む。

しかしその手は俺の手をしっかりと握り、

背中からは吹き荒ぶ雪にかき消されそう。

「どうか、このまま…」

小さな呟きは届く事無く、俺は肩に掛けられた隊服を強く握った。

『銀さん、神楽ちゃんが…！』

昨夜新八が万事屋へ電話を掛けてきた。

定春と雪遊びで山へ行っただけで帰らない、と。

『雪も強くなってきたるし、まさか何処かで道に迷っているんじゃない？』

俺は万事屋を飛び出した。

さく…さく…さく…

前を歩く男が此方を見ずに言った。

「寒くねーか？」

「……うん」

お前の方が寒いだろ、なんて言えなくて。

- 神楽を探しに出た俺は案の定迷ってしまい、山の洞窟でしゃがみ込んでいた。

「…寒い…」

感覚の無くなった指先を吐く息で暖める。

外は一寸先も見えない程の吹雪。

思い出すのは想い人の事ばかりで。

ああ俺、此処で死ぬのなんて冷静に考えた。

愛煙家で、マヨラーで、口の悪い、でも優しいアイツ。

伝えられなかった想いは涙に変わり

「…ひ、じかたあ…」

こんな事なら伝えておけばよかった、と少し後悔し

俺はゆっくり目を閉じた。

「もうすぐ麓だから」

その声にはっとして前を見る。

少し此方を向いている顔は、優しく微笑んでいて

「…うん」

俺は俯いて、繋いだ指に力を込めた。

「…ずや、…万事屋！」

遠くから声が聴こえる。

「万事屋！……銀時！」

ああ、これはアイツの声だ…

じゃあ今、肩を揺さぶっている手もアイツなのかな。

だったらいいな…。

まだはつきりしない意識の中でそんな事を思う。

「銀時！しっかりしろ！」

一層激しく揺さぶられ、はっと我に帰った。

まだ重い瞼を開けると

「銀っ…！良かった…」

震える声で強く抱き締められた。

「ひじ…かた…？」

小さくその名を呼べば抱き締める腕に力が入る。

「ひじかたあ…」

その腕が、声が、体温が、土方の想いを伝えているようで、
切なくなり、また少し泣いた。

さく…さく…さく…

「なあ」

土方の歩みが、少しだけ遅くなる。

「もしも、このまま…」

口籠る土方。

その先は聞かなくても解る。

だって俺も同じ気持ちだから。

けど…

「それは出来ねえよ」

もしも、このまま二人で居られたら

そんな願いを叶えるには、俺達を守る物が増えすぎた。

常に争いに身を置く土方にとって俺の気持ちは足枷でしか無く、そのせいで命を落とすかも知れない。

そう思うと気持ちを伝えるのは躊躇われ、

そしてきつと、土方も同じ事を思っている。

解ってる。

だけど、だけど

「だけど…、もう少しだけ…」

目を伏せ、深く指を絡ませると、

「ああ…」

より強く握られ。

そこから土方の想いが流れ込んできて

胸が苦しくなった。

「…ちゃん！」

「銀さん！」

「トシー！」

遠くから声がする。

そしてだんだん近くなる。

俺達は顔を見合わせ微笑み合い

静かに、決意を込めて指をほどいた。

暗い夜道と恋の華

- 暗い夜道と恋の華 -

夜も更けて来た頃、

此処は真選組屯所副長室。

目の前には大量の書類。

俺は事務的に判子を押しながら時計を見た。

午後8：57

そろそろだな。

俺はコートを羽織り、副長室を後にした。

「さぶっ」

吐く息が白い。

屯所の門を出て、何時もの道に行く。

『まるで逢い引きだな』

心の中で呟いて

- 逢い引き、

その響きが満更じゃない自分に驚いてみたり。

気を抜くと直ぐに緩んでしまう頬を引き締め、何時もの曲がり角を曲がる。

そして目に飛び込んで来るのは、明るい自動販売機の明かりと、

寒そうに佇む男。

「よお」

「ああ」

決して約束している訳では無い。

「何、お前また煙草買いに来たの？」

俺はたまたま通り掛かったやつてさ。

そう言ってるが、コイツは毎日此处へ来ている。

そして俺も。

「お前は毎日通り掛かったちゃんだな」

少しからかう様に言えば

「悪いかよ」

そう言っつて顔を反らすコイツの鼻は少し赤くて。

そつえばさっきからしきりに指先を暖めている。

「この寒空の下、俺を待っていたのか。」

改めてそう実感し

『可愛いな』

何て思ってしまった。

思わず赤くなつた指先を掴んだ。

「ひゃっ！」

そんな声すら可愛く思え、指先を包んで暖めてやる。

「あ、あの…土方？」

困つたように上目遣いで俺を見る顔は見る見る赤く染まり。

「あの、もう大丈夫だから」

それでも俺は暖めて続ける。

「ね、土方…」

懇願される様に潤んだ瞳で見つめられ、俺はそっと指先を離れた。

漸く指先を解放されたコイツは、それでもまだ暫く俺を潤んだ瞳で見つめ

「じゃ、俺もう行くから…」

そう言っって背中を向け、歩き出した。

俺は何だか名残惜しくなってしまう

「なあ、」

声を掛けるとピタリと止まる背中。

「明日もまた、たまたま通り掛かってくれねえか？」

そんな事を口走る俺に、アイツは見た事無い位赤い顔で小さく

「おう、たまたまならな」

と返し、また歩き出した。

俺は暫くその背中を眺め

「早く明日にならねえかな…」

ひっそりと呟き、夜空を見上げた。

黒い欲、白い慈悲

- 密と蜜 -

ぬるい裏入ります

今日はついてない。

仕事でミスし、財布を落とし、総吾のバズーカは直撃だ。

人生が思い通りにいくとは思って無い。

『だが一つ位、思い通りになることが有っても良いんじゃないか？』

そう思い、自分の下で乱れる男を見る。

「はあっ…あっ、んっ…ひじかたあ…」

綺麗な銀糸、妖しく光る紅い瞳、乱された着物から覗く白い肌。

その細い腰はねだる様に揺れている。

「何だ、まだ足りないのか？…相変わらずヤラシイな…」

そう耳元で囁けば涙を溢し恥じらって、俺の浅ましい欲が刺激される。

「ならば姫のお望み通りに…っ」

今までよりも深く貫けば

「ひっ、んっ…あっ、やっひじ…っんあっ、は、げしいっ…！」

しなやかに背中を反らせ喘ぐ。

「んっ、んあっ…きよっ、…ふあっ…なん、か…はげしっ…！」

潤んだ瞳で此方を見る様はとても淫らで、美しい。

・コイツは、俺のもんだ

その一心で腰を打ち付け、中を掻き回す。

「んんあっ…やっ！もっ…だ、めえっ…」

ここぞとばかりに腰の律動を早めると、限界を訴える悲鳴にも似た声。

・コイツのこんな姿、誰にも見せたくねえ

「…っ！ぎんっ、このまま…やり殺しても…っ、いい、か…？」

思わず口をついて出た言葉に、自分で驚いた。

腰の律動はそのままに、銀時の反応を伺う。

紅い瞳はゆっくり動き、俺を見据え、こう言った。

「…んっ、土方がっ、あっ、そう、…したいなら…っあ、いいよ…」

…殺して…？

少し微笑んで俺を見る様は慈悲深い女神の様。

その言葉は俺の征服欲を満たすには十分で

「くっ…！ぎんっ…」

「あっ！ああんっ…ひじ…っ、かたあ…！」

俺はすがりつくように、銀時は包み込む様に抱き締め合い

「んっ…ふぁっ、あ…ああっ…！」

「くっ…、はぁっ…、くうっ……！」

貪るように唇を求め合い

「はぁっ…ひじかたっ、ひじかたぁっ…っ！」

「っ、ぎんっ…ぎん…っ！」

互いの名を呼び合いながら、その後も繰り返して愛し合い、

俺の黒い欲は解き放たれ、銀時の足を白く汚していた。

妄想 炸裂

- 妄想炸裂 -

…ん？何か良い匂いがする…

トントン

ジュージュー

台所からだ。

今日は新八は休みだし、神楽は間違っても料理なんかしない。

じゃあ一体誰だ？

半分寝て、半分起きている頭でそんな事を考える。

チラリ時計を見れば朝の7時。

『誰だ？あーでも良い匂いだなあ…』

「銀っ！ぎーんっ、おーきーてー！」

俺はあのまま二度寝してしまったらしい。

誰かが俺を起こしている。

この声…

ん？この声はっ！

「もぉゝ、ぎんってば起きてよぉ」

「とおしろぉゝんっ」

そうだった。

俺達、夫婦になったんだった。

ってゆーことは

十四朗は

俺の…

「俺の嫁万歳っ！」

ガバツと飛び起き、抱き付いてそのままの勢いで押し倒す。

「やんっ、銀ってば…だめっ」

「だって十四朗可愛いんだもん」

何時もとは違う淡い水色の着流し、

ピンクのフリフリエプロン

何時もよりデレ度の高い甘えた声色。

これらを兼ね備えた十四朗は

無敵っつ！

「だからダメってば。お味噌汁冷めちゃうよ？」

なあああにいい？

十四朗の手料理だとおっ？

俺の為にっ？

そんな…そんな事されたら…

「萌えーっっっ！！」

俺が叫ぶと、下の階から物音が。

そして玄関が勢い良く開いた。

「うるせええっ！こちとら夜の蝶は今から休むんだよ！静かにおしっ！」

「うつせえばあつ！こちとらまだ新婚ほやほやなんだよっつ！」

怒鳴り込んで来た下のばあを追いつ返し、俺は十四郎の手料理が並ぶ食卓に付いた。

「「いただきます」」

ご飯にお味噌汁、焼魚に玉子焼き。

何とも理想的な朝食。

ひたすらもぐもぐと食べていると

「美味しい？」

不安気に首を傾げて聞いてくるマイワイフ。

「ウマイよ、どれも」

「良かったあ」

安心したように笑うワイフを見て

『いや、ホントはお前の方を頂きたいんですけど』

などと考えたが口には出さない。

食後にゆっくり頂く事に決めているから。

「「ごちそうさまでした」」

食べ終わると十四朗は食器を片付けだす。

台所に立つフリフリエプロン装備の十四朗に、俺の妄想は膨らむばかり。

『今日は絶対エプロンプレイっ！』

そう心に固く誓っていると

「ぎん？」

いつの間にか片付け終えた十四朗が目の前に。

うーん、やっぱり可愛い。

「あ、お布団片付けなきゃ」

寝室へ消えていく十四朗。

あ、今から美味しく頂くんだからお布団片付けられたら困るじゃん。

そう思い、立ち上がるうとする

「ぎん…」

寢室から小さく呼ぶ声が。

何事かと思い、襖を開けると

「ぎん…」

何ということだ。

十四郎が布団の上に艶かしく座り、潤んだ瞳で俺を見ている。

「ぎん…、夜まで待てない…」

良く見れば何時の間にやら裸エプロン。

『何この子可愛すぎなんですけどおお！』

俺は全ての神に感謝し、恭しく手を合わせ宣言した。

「いただきます」

……つて夢を見ました』

「うぜええ！そして長えええ！！」

朝から珍しく電話を掛けてきたかと思えば

「この腐れ糖尿天パがああ！いつぺん死んでこいや！」

長々と語りやがってコンチクショウ。

『あーあ、夢の十四朗はあんなに可愛かったのになあ』

「だから俺を勝手に夢に出すな！」

『甘えた声でぎんぐってさ』

あークソっ、本気でムカついてきた。

『素直で可愛かったなあ』

ブチンッ

自分の中で何かが切れた。

「そんなの夢が良かったんなら…ホントに俺を嫁にしやがれクルクル天パがあっ！」

おまけ

その日の夜、

漸く仕事を終えて部屋には戻ると

「十四郎、結婚して下さい」

婚姻届と指輪を持って正装した銀時が待っていた。

哀と愛

- 哀と愛 -

解ってたんだ。

何時かこんな日が来る事。

「……結婚、する事になった」

土方は俺の顔を見ずに、告げた。

「……うん」

解ってたんだ。

でも覚悟は出来て無かったみたい。

俺、今普通の顔出来てんのかな。

「……止めないのか？」

ああ止めたいさ。出来る事なら。

でも

「お前ももう良い歳だしな。丁度良かったんじゃない？」

出来ないんだ。

「はっ。お前にとってはそんなモンだったのか」

俺だけ本気になってバカみてーだ

自嘲気味に言い捨てる土方。

俺は何も言えなくて。

…胸が、痛い。

壊れそうだよ。

…そのまま土方は出ていった。

あれから土方から電話も来ない。

街でも会わない。

もちろん万事屋にも来ない。

土方はきっと俺の事嫌いになっただろうな。

「良かったんだよ…これで」

でも俺は好きままだ。

「やっぱ…結構苦しいな」

愛する人の来ない部屋で、鳴らない電話を見詰めて呟いた。

「銀さん聞きました？土方さん結婚するらしいですよ」

ある日、買い物から帰ってきた新八が言った。

「へえー、そう。まああんなマヨラーじゃ奥さん苦労するだろうな」

窓の外を見ながら、何時もの気だるい口調で言う。

「そして僕らも招待したいって、土方さんが」

にこやかに言う新八の手には、残酷にも3人分の招待状。

「銀ちゃーん。早く起きるアルー」

「銀さん、また飲みすぎたんですか？今日は土方さんの結婚式ですよ？早く支度して下さい」

月日が流れるのは早いもので、今日は土方の結婚式当日。

行きたくない

って言ったら子供みたいだろうか。

でも俺が行っても行かなくても、アイツは結婚してしまう。

そう仕向けたのは俺。

「おう、今起きるから」

行けば、俺の恋は終わるだろうか。

行けば、少しは楽になれるだろうか。

そんな事を考えながら、俺は出掛ける準備を始めた。

『それでは新郎新婦の入場です』

豪華な大きい扉が開き、ゆっくりと歩いてくる二つの影。
沸き起こる拍手。

ゴリラに至っては泣き出す始末。

一見、幸せそうな二人。

だけど気付いてしまった。

ほんの一瞬だけ、土方が泣きそうな顔で俺を見た事に。

それでも式はつつがなく進み、残すはケーキカットのみ。

『それでは、新郎新婦共にお色直しの為一旦退席致します』

「あー、俺ちよっとトイレ」

俺は席を立った。

「ちょっと、すみません困ります」

「や、ちょっと新郎と話したいただけだから」

「でも…」

「ほんのちょっとだけだから」

俺が来たのは新郎控室。

何とか係りの人を言いくるめてドアを開けると

「ぎん…とき…」

目を見開いて驚く土方が。

「折角の晴れの日なのにそんなシケたツラしてんじゃねーよ」

何？そんなに銀さんの事好きだったの？

言い終わらない内に、

土方に抱き締められた。

「銀、俺と一緒に逃げてくれ」

すがり付く様に俺を抱き締める土方。

ああ、土方はまだ俺の事好きで居てくれたんだ。

嬉しいなあ。

もう泣きそうだよ。

でも

「何バカな事言ってるんだ」

「ぎん…」

土方の目の涙が溜まる。

「お前は、結婚しなくちゃならねえ」

解ってんだろ？

子供に言い聞かせる様に背中を撫でながら言う。

真選組副長として、真選組を護る者として。

お前は、大事な物を護らなきゃならねえ。

その隣に俺が居ちゃいけないんだ。

俺の決意の固さが伝わったのか、もう土方は泣き言を言わなかった。

「じゃ、銀さん飲み過ぎちゃったんでもう帰るわ」

そう言い、泣きそうな顔を見られたくなくて背中を向けると

「ぎん…」

頬を両手で挟まれ

口付けされた。

「もう、最後だから。でも、今も本気で愛してる。お前が望むなら俺はこの思いを背負って生きていく」

別の場所で

そう言った土方の声は震えていた。

俺は土方の手をゆっくり離し、告げた。

「お前はもう十分色んなモンを背負ってる。そんな気持ちまで背負うことあねえ」

土方が俯く。

「その代わり、お前のその気持ちまで俺が背負って生きていく」

土方がはっと顔を上げたその時

コンコン...

「準備はお済みですか？」

二人ともドアを見る。

「もう時間切れみたいだな」

「銀…」

「お前の事を…俺はずっと見てるから、お前はお前の大事なモン、立派に護り通せ」

土方は暫く俺を見詰め、

小さく頷くと背中を向け歩き出し部屋を出て行った。

一度も振り返らずに。

これで良いんだ。

共に生きられないと知りながら、俺達は想い合って生きていく。

それはとても苦しく、しかし甘美な事で。

まだ土方の温もりが残る頬に触れ、小さく呟いた。

「土方、どうか…幸せに」

イブ イブ イブ2011

- イブ イブ イブ2011 -

バカッパルの会話のみ

「なあ、銀時…今日見廻り中に気付いたんだが今週末って、アレだよな」

「……アレ？」

「アレだよ、アレ」

「何かあったっけ？」

「ちょ、お前アレ解んねえの？今町中その話題だぜ？」

「だーからー、アレって何だっつーの」

「本気で言ってるのか？成る程…お前位のバカ天パになるとアレも解んねえのか」

「ちょ、それは聞き捨てならねえぞお！天パは今関係ねえだろうが！バカマヨ侍がああ！」

「おまえがあんまりにも解んねえからだろうが！」

「お前が回りくどいからだろうが！俺だってちゃんと言葉にして誘

われてえんだよバカ！」

「おまつ、解つてたんじゃねえか！」

「あーでもアレってなんだろうなあ？ちゃんと言ってくんないと銀さん解んなさーい」

「くっ…、今度の土日はクリスマスだから2日共予定開けとけ年中ブー太郎がああ！！夕方迎えに来るからめかし込んで待ってるやああああ！」

「あークソやつば嬉しいじゃねえかバカヤロー！土方大好きい！」

「可愛いこと言うんじゃねえ！俺も好きだああ！」

重い 想い

- 重い 想い -

「あれ？大串くんじゃん」

夕暮れ時、市内見廻り中に声を掛けられた。

俺の事をそんな風に呼ぶのは一人だけ。

万事屋主人 坂田銀時

「あれ？聞こえなかったのかな？おーぐしくーん！」

「うるせええ！俺は大串じゃねえつつってんだろ！」

何時もと同じやり取り。

コイツにとっては何でも無い事なんだろうが、

「そんな怒んなくてもいいじゃん。ニコチンばっか摂取し過ぎじゃねえの？」

俺にとっては特別なやり取り。

「お前みたいに糖分ばっか摂取してるヤツから言われたかねえよ」

俺は、このふらふらした銀髪ヤローが好きだ。

「じゃ、お仕事頑張ってねー」

手を振りながら去って行くアイツを見ながら、煙草に火を付ける。

好きだなんて、絶対言えない。

俺は臆病だから、今の生温い関係で満足だ。

だけどこの感情は日に日に大きくなり、どんどん重くなってきやがる。

こんな感情、燃えちまえばいい。

かぶき町を紅く染める夕日の中に。

病は気から

- 病は気から -

「銀時…お前は俺の心に咲く一輪の花だ…」

「ひじかたあ…好き。ホントに好きい」

もう夜だというのに明かりも付けず、薄暗い万事屋で甘い言葉を紡ぎ合う二人。

足を絡ませ、指を絡ませ、視線も絡ませている

土方十四郎と坂田銀時。

その二人である。

良く見れば二人共妙に顔が赤い。

鼻も垂れている。

でもそんな事はお構い無しだ。

「ねえ土方あ。ちゅうしてえ？」

「まったく…可愛い子猫ちゃんだな」

付けたままのテレビだけが二人を淡く照らしていた。

『…現在江戸を中心に猛威を奮っている謎の病気は蔓延する一方です。微熱、鼻水といった一見風邪の様な症状ですが、自分の思い、考えている事を洗いざらい話してしまうという特徴があります。現在治療法は確立しておらず、自然治癒を待つしかないようです…』

そして二人はテレビを消し、絡まり合ったまま布団へ潜り込んだ。

次の日も二人の愛は止まらなかった。

「なあ、銀時」

「ん？なあに土方あ」

「俺と…結婚してくれないか？」

鼻を垂らしたままのプロポーズ。

しかし銀時はホント一向に構わないようにで

「うれしいっ！土方愛してるうう！」

涙を溜めて抱き付いた。

「じゃあ、行ってくるから」

「うん、気を付けてね」

「ピンポン鳴ったりしても絶対に出たらダメだからな。ちゃんと戸締まりしてお利口にしてくれよ、ハニー」

「うん、行ってらっしゃい、ダーリン」

たかが役場へ行くだけなのだが。

「行つてらっしゃい」

銀時はずっと手を振っていた。

暫くして土方が戻つて来た。

「お帰りなさい！寂しかったよお」

「ごめんな、銀時」

などと会話をしながらキスの嵐。

「でも、ほら」

土方が懷から取り出したのは婚姻届。

「土方あ、俺達、夫婦になるんだね」

「ああ、世界一幸せにしてやるからな」

そして二人はペンを取った。

数分後、書き終えた二人は感動に浸っていた。

「これ、出したら夫婦なんだね」

「おう、出したらお前は俺の嫁だ」

何だかバカ丸出しの会話であるが、当の本人達は至って真面目なのだ。

「ね、すぐに出しに行く？」

「いや、こーゆーのは大安吉日が良いんだ」

「わあ、土方物知りだねえ」

そして二人は書いた婚姻届を枕元に置き、今日も絡まり合いながら布団へ潜り込んだ。

翌日、先に起きたのは土方だった。

そしてふと気付き

「…なんだ？これ」

枕元の婚姻届を手に取り、絶句した。

「ぎ、ぎ、銀時いい！起きろ！起きてくれ！」

隣で寝ている銀時を揺さぶり起こす。

「もう、何なの土方。まだ銀さん眠いんですけどお」

「これ！これを見る！」

銀時の目の前に婚姻届を突き出す。

「はあああ？婚姻届え？誰と誰の」

「バカかお前は！名前を良く見ろ！」

そこに書かれている名は

土方十四郎（印）

坂田銀時（印）

「はああ！？まじでかああ！……ってかちよつと待て。俺等ここ数日、何してた？」

「何って……うわああ！思い出したあ！何してたってゆーかナニばっかしてたじゃねえかああ」

どうやら病気が治ってしまったらしい。

もちろんその間の記憶は、有る。

「土方、お前甘い声で甘い言葉囁いちゃったりしてたよなあ」

「バカか。それはお前もだよ！」

「つてか二人共……」

「きめええええ！」

二人の叫び声は見事にハモリ、まだ早朝のかぶき町に響き渡つたのであつた。

- 後日談 -

ここはかぶき町役場。

二人の男が窓口へ訪れていた。

「あの…すみません。今のところこの国では男女間の結婚しか認められてなくて…」

「「ですよー」「」

酒と泪と男と男

・酒と泪と男と男・

「何だあ？もう飲めねえってのかあ？」

ここは何時もの居酒屋。

一人で飲んでたら、急にやって来て隣を陣取ったコイツ。

「あー…銀さん今日は一人で飲みたい気分なんですけどお」

やんわりと断ってみたが

「ああ？」

一睨みされて

「イイエ何でもありません」

敢えなく玉砕。

グラスを口に運びながら、チラリと隣を見遣る。

土方十四郎

俺の、好きなヤツ。

諦めようと思ってた。

だって俺みたいなおツサンから好かれても、土方が困るだろうから。

だけどこんな事されたら諦め切れない。

無駄な期待はさせないでくれよ。

そう思いながらも俺の目は土方を見てしまう。

一体此処は何軒目だろう。

もうかなり酔ってるようだが。

「ってかそんなんでまだ飲めんのかあ？」

何時もの調子で話し掛けると

「ああ？俺はまだまだイケるぜえ？」

そう言つて一気にビールを飲み干した。

そして

「俺はよう、ただお前が一人寂しく飲んでんのが見えたから……気になっただけだ」

それだけだかな

ちょっと照れた様にそっぽ向いていう土方。

やっぱり前言撤回。

俺を期待させたお前が悪いんだからな。

とことん好きでいてやるから、

覚悟しとけよ？

イブ 2011

- イブ 2011 -

イブ イブ イブ 2011の続き。

今日はクリスマスイブ。

土方は約束の時間になっても来なかった。

机の上に足を投げ出し、ジャンプを読みながら待った。

窓の外は見ない。

心底待ってるみたいで悔しいから。

時計がくるくる回る。

一時間…二時間…

土方はまだ来ない。

『仕事で何かあったのかな…』

じゃあもう今日は来ないかもね。

しゃーねえな。

「アイツは副長様だもんなあ」

年中暇人な俺とは違うんだよ。

「一人で飲みに行くか」

言ってみても、動く気にはさらさらなれなくて。

「…電話くらい出来るだろうがよ」

二時間半

鳴らない電話

土方は…

「…よっこらせ」

俺は意を決し立ち上がりマフラーを手に取ると、浮かれた町へ出掛けた。

町はバカみたいに人が溢れていて、何だか一人は俺だけみたいに見えるてきて。

俺は手早く用事を済ませ、逃げる様に万事屋へ戻って行った。

万事屋の玄関を開ける。

『ひよっとしたら来てるかもしれない』

俺の甘い期待はすぐに裏切られた。

だれも居ない部屋。

窓から無遠慮に入り込むイルミネーションの明かりが部屋を照らしていた。

「ま、解ってただけどね」

だけどね、土方。

早く来てよ。

俺、待ってるんだよ。

早く、来て。

俺は泣きそうな気持ちを押さえながら、さっき買ってきた袋を開けた。

ケーキ、チキン、大量の甘味、マヨネーズ、そして酒。

テーブルの上に並べ、暫く無言で眺めていた。

もうこんな時間だから、どこかへ飲みに行くのもしんどいし。

でもちよつと買いすぎちゃった。

やっぱ土方が来てくれないと困るよ。

余っちゃっじゃん。

チツ…チツ…

時計の音が耳に付く。

あと少しで、日付が変わる。

そしたらもう、約束の日じゃなくなる。

あと五分

四分

三分…

ガラッ

突然玄関の開く音が。

「ぎゃっ
」

すっかり油断してたから変な声が出た。

こんな時間に来るのは、アイツしか居ない。

「まったく、こんな時間にどちら様ですかコノヤロー」

不機嫌剥き出しで声を掛けると

「待ってたのか？」

走って来たのだろう。

隊服のまま、息を切らせた土方がニヤリと笑う。

「別に待ってねーし」

プイッと顔を反らして言えば、土方が少し笑った。

何だか恥ずかしくなってきた俺は、

「ま、上がればいいじゃん」

土方を招き入れた。

テーブルの上の料理を見て、

「これ…」

「あー、飲みに行くのもキツイだろうから、今日は此处でパーティ

「だ」

土方に言うと

「ありがとう、銀時」

ごめんな？遅くなって

なんて頭を撫でられると、押さえ込んでた寂しさが溢れてきて。

泣きそうな顔は見られたくないから、土方に抱き付いて

「……バカ」

胸に顔を埋めて呟く。

土方はずっと頭を撫でてくれていた。

「でも、来てくれて嬉しいよ」

こんな日だから少し素直になって見たけど、やっぱり恥ずかしいや。

俺はもっと強くしがみつき、土方の匂いを胸一杯吸い込む。

時計の日付はもう変わっていた。

M
e
r
r
y
X
·
m
a
s

夕暮れマジック

・夕暮れマジック・

超短文です。

暮れも押し迫ったある日の夕方。

珍しく仕事が早めに終わった土方は、急に思い付いて万事屋へ来ていた。

ピンポンも鳴らさず玄関を開け、

「ただいまー」

土方としてはほんの冗談のつもりだったのだが、

「おかえりー」

と、当たり前のように返されて。

毎日こんな風に暮らしたいなんて思ってしまったて、

「っ！ぎんっ！俺と結婚してくれ！」

なんて、思わず口走ってしまう。

そんな、不思議な夕暮れマジック。

奥の奥まで

- 奥の奥まで -

チャリン

万事屋に響く金属音。

「あ、やべっ」

急に銀時が声を上げた。

「どうした？」

「いや、棚の裏にバイクの鍵落としちゃった」

銀時は棚の裏に手を差し込み、取ろうと試みるが

「ダメだ。ギリ届かねえ」

取れなかったらしい。

「しょうがねえなあ。退いてみる」

しぶとく粘っている銀時を退かし、俺が手をつ突っ込んでみる。

「くうっ、微妙に届かねえ」

その時

「土方、もつと奥までっ」

棚の上から除き込んでいた銀時の声。

その言葉に、力一杯伸ばしてた腕を思わず緩めてしまう。

「違っう、もつと奥の方っ」

……こんな事でこんな事考えるなんて、自分でもどうかしてるとは

思うが

「…銀時、さっきのもう一回言ってくれないか？」

頼んで見ると

「もつと奥の方まで？」

普通に言ってくれる銀時。

『何だこの妙なエロさはああ！ヤバイ俺の妄想がヤバイ！』

目一杯腕を伸ばしながら、そして伸びそうになっている違う部分を
必死に押さえながら心の中で叫ぶ土方であった。

イブ2011その後

- イブ2011その後 -

12 / 25 深夜

「もうすぐ終わっちゃうな」

俺は惜しむ様に窓の外を眺めながら言う。

窓の外では何処の店もクリスマスツリーを片付け、いそいそと門松を出している。

「ってか、クリスマス終わったから速攻正月モードって…皆切り替え早えなあ」

後ろのソファから土方が言う。

「でもさあ、楽しい事はいっぱい有るほうがいいじゃん」

振り向かず、窓の外を見たま言つと、

「まあ確かに…お前とこつやって過ごせるなら、悪くねえな」

そんな言葉と共に腕が伸びてきて。

まだ片付けてないツリーの明かりの中で抱き締め、抱き締められながら窓の外を暫く眺めていた。

悩みの種

- 悩みの種 -

土方十四郎は、最近悩みがある。

どうにも解らないのだ。

自分の感情、という物が。

何かが気になるのだ。

でもそれが何か解らない。

イライラもややもや考えていると、決まってあの天パが出てきて邪魔しやがる。

そういえば常に頭の片隅にアイツが居る気がする。

ホント一体何なんだアイツ。

腕を組み、頭を悩ませながら見廻りしていると

「あ、大串くんだ」

悩みの種が現れた。

「大串じゃねえつつつてんだろ」

不機嫌剥き出しで返せば

「わあ、大串くんこわーい」

などと返されて。

頭の中でも現実でも俺の邪魔して、ホントこいつ何なんだ。
ムカつきついでに頭を叩いてやると

「ひどーい」

なんて抜かしやがった。

その反応が面白くて、再度頭を叩く。

「もー、ホント何なの？」

頭を押さえて睨んでくるアイツを見て

「あ、」

解った。

解っちまった。

俺は愛されたいんだ。

このふざけた天パに。

頭を擦りながら

「ホントにマジで何なんだ」

何て言いながら去っていくアイツに

俺だけ見て欲しくて。

だから何時も喧嘩腰で、突っかかり

少しでも俺の事を考えて欲しくて。

「…なるほどな」

そして俺は妙にすっきりとした顔で、また見廻りをするのだった。

赤い糸

- 赤い糸 -

「ねえ、赤い糸って知ってる？」

小指を眺めながら、土方に問い掛ける。

土方は少し訝しげな顔をして、

「運命の人と結ばれてるってヤツだろ？」

下らねえ

と、返してきた。

俺はまだ小指を見詰めながら

「やっぱ土方も知らない女と繋がってんのかな？」

呟くと

「まあ、お前もだろうがな」

と返されて。

「じゃあさ」

此方を向く土方。

「俺の糸、切るから」

だから

「土方のと、繫げてくんない？」

目を見開く土方。

そして少し赤くなり

「…勝手にしろ」

と小指を差し出してきた。

俺は赤いペンを持ち出して、土方の小指と俺の小指に赤い印を描く。

ゆっくりと

丁寧に。

お願いだ神様

今だけでもいい。

ホントに繋がりますように。

願いを込めて

同じ印の付いた小指を絡め、祈った。

深夜、自室にて

・深夜、自室にて・

草木も眠る丑三つ時。

土方十四郎は屯所の自室で不意に目を覚ました。

誰か来る。

静かに枕元の愛刀へと手を伸ばし、警戒する。

『こんな時間に侵入して来るたあ……ただ者じゃあねえな』

何時でも斬り掛かれるように布団の中で体制を整えた。

ゆっくりと近づいて来る気配。

そしてそれは俺の部屋の前で止まった。

『狙いは……俺か』

刀を握る手に力が籠る。

中の気配を伺っているのか、なかなか襖は開かない。

俺は襖を睨み続けた。

暫しの沈黙。

そして

聞こえたのは意外な声だった。

「土方：起きてる？」

か細い声。

銀時？

動揺して刀身がかちやりと音を立てた。

「起きてるの？」

音も無く襖が開く。

其処には、愛しい恋人の姿が。

「銀時…どうしたんだ」

驚いて声を掛ける俺に

「夜這いに来ちゃった」

何時も通りなおどけた口調。

しかし

「銀時…？」

その瞳は赤く、瞼は少し腫れぼったい。

泣いていたのか？

銀時は襖を閉め、俺の布団に潜り込んできた。

「ごめんねえ、どうしても逢いたくなっちゃって」

すぐ帰るから、ちょこっただけだから

そう言って俺の胸に顔を押し付ける。

「どうしたんだ？」

「…」

返事をせず更に強く抱き付いて来る。

俺は小さく溜め息をつき、柔らかな銀髪を撫でながら話し掛けた。

「まあ、聞かれて話すような素直なヤツじゃねえよなあ、お前は」

腕の中の銀時がぴくりと身動きする。

「でもな…」

さらさらと銀時の頭を撫でながら

「俺に逢いたくなったら、何時でも来い」

俺が言うと、銀時ははっと顔を上げ、また胸に潜り込んだ。

「……ありがと、土方」

そう呟いた耳は真っ赤で。

抱き締めている身体はとても小さく見え、

優しく、大事に包み込んだ。

聞こえていた少し震えた呼吸が寝息に変わる頃、もう外は白み始めていた。

もう、行かなくては。

「おやすみ、銀時」

安らかな顔で眠る頬に口付けを落とし、隊服を抱え部屋を後にした。

優しい男

・優しい男・

「土方さん、団子屋寄ってきませんか？もちろん土方さんの奢りで」

今日は総吾と市内見廻り。

コイツはさっきからこの調子だ。

「あ、」

「だから団子屋は寄らねえつつってんだろっが！」

総吾が言つより早く怒鳴ると

「旦那じゃないですかい」

手を振る総吾。

その視線の先には

坂田銀時

俺の、恋人。

どきりと心臓が跳ねた。

「あれ？沖田くんじゃん。大串くんも」

へらつと笑い、此方へ近づいて来る。

「旦那あ、何してんですかい？」

「んー、ちょっと依頼でね」

そう言いながらちらつと俺を見る銀時。

『やばっ
…』

熱くなる頬を隠したくて思わず目を反らしてしまった。

すれば

「あ、大串くん肩に何か付いてるよ」

俺に手を伸ばしてきて

「っ！」

耳を掠めて肩に触れてきやがった。

『っ！コイツわざとっ』

コイツは俺の弱い場所を知ってる。

睨み付けると、ニヤツと笑い

「あれ？背中の方に落ちちゃったかな？」

次は俺の両肩に手を掛け、背中を覗き込んできやがった。

「てめっ！何：！」

これはさすがに抵抗の声を上げる。

そんな事はお構い無しに肩を持ち、身体を密着させてくる銀時。

そして

「今日も可愛いよ、十四郎」

熱い吐息と共に囁き込まれて。

熱くなる顔。

もう押さえきれない。

拳を握り、俯いていると

「あれ？旦那ヤケに土方さんに優しいじゃないですかい」

からかう様な総吾の声に羞恥が増して。

「そりゃあ大串くんは可愛いからねえ」

当たり前のように答える銀時。

「まあ土方さんはからかい甲斐がありますからねい」

そんな事を話ながら団子屋へ消えて行く二人。

その背中を見遣り

「ホント、優しくねえ」

そう呟いて、

煙草に火を付け、まだ収まらない心臓を抱えて一人で見廻りを続けるのであった。

好きだ 好きだ 好きだ

- 好きだ 好きだ 好きだ -

「土方、好き。ちょー好き。もうどうしちゃったのってぐらい好き」

銀時はさっきからこの調子だ。

大晦日の万事屋。

今日の仕事は夕方から初詣の警備だ。

一緒に年を越せねえからと思って万事屋へ来てみたのだが

「土方、もうホント好き。好き好き好き好き」

俺にべったりくっついて離れない銀時。

「うるせええ！そしてくつつくな！」

煙草もろくに吸えねえ状況につい怒鳴ったら

「十四郎のけちー」

口を尖らせ不満そう。

「ったく…どうしたんだよ」

普段から好き好き言っではいるが、ここまでヒドイのは始めてだ。

すると銀時は

「だって今日は大晦日じゃん。じゃあ今日好きって言っとかねえと今年は今言えないんだぜ？」

ニヤッと笑って得意気に言う銀時に

「っ！」

俺は何も返せず

悔しいが

『チクシヨウ、愛されるのがこんなに嬉しいなんてっ…』

とか思ってしまう。

来年もまた、二人でいれますように

「来年はもっと愛しちゃうからね、十四朗」

「おう、望むところだ」

薔薇

- 薔薇 -

人は時として

危険と知りつつも

回避出来ない事がある。

何故ならば、危険な物は往々にして美しく魅力的であるからで。

例えば今、目の前に居る男の様な。

今からうちに来ない？

その男は言った。

行つてはイケナイ

頭の中で響く警告も、時既に遅し。

俺はもう

その紅い瞳に射抜かれ

低い声に犯され

身も心も堕ちていた。

差し出されたその手を握れば

俺はお前に溺れてしまう。

傷付けられ

引き裂かれ

堕ちてしまふ。

刺さった棘は甘く身体を駆け巡り

それはむしろ甘やかな痛みで。

お前の毒に犯された俺にもう逃げ場は無い。

俺は、差し出されたその手を握った。

星空デート

・星空デート・

「星キレイだなあ」

居酒屋からの帰り道。

銀時が夜空を見上げて言う。

「そうだな」

今日は新年会と称して二人で飲んだ。

二人共、ほろ酔いで千鳥足。

「ほら、ちゃんと前見ねえと転ぶぞ」

「はいはい」

そう返事をするものの、空を見上げたまま歩く銀時。

「うおっ」

ほら言わんこっちゃない。

よろめく銀時。

「つぶねー」

焦った様に呟く銀時に

「ほら」

手を差し出す。

「？」

よく理解していないようだから、無理矢理手を掴む。

「ひっ、土方？」

「ホント世話の焼けるヤツだ」

驚く銀時を無視して指を絡め、隊服のポケットに突っ込み

「こうしてりゃ転ばないだろ？」

ニヤリと笑ってやれば

「ふっ！」

案の定真っ赤になる銀時。

俺が歩き出せば、手を握られたまま付いてくる。

ホント可愛いったらねえよ。

「ねえ、土方」

「ん？」

手を握られ、黙って付いて来ていた銀時が急に立ち止まる。

「来年も一緒に、新年会しような」

俯いて、でも繋いだ指に力を込めて俺に言う。

「…おう、もちろんだ」

ポケットの中で握り返して、

指を深く絡め合い

二人で顔を見合わせ、笑った。

居眠り姫

- 居眠り姫 -

昼下がりの真選組屯所で、

皆が忙しく働いている中で、

炬燵で寝ている男が一人。

「あ、もう旦那ってば…そんな所で寝てたら風邪引きますよ」

そう、万事屋主人 坂田銀時である。

通り掛かった山崎が声を掛けるも

「んー…」

完全に寝ている様子。

何故、銀時が屯所に居るのかというと、

万事屋の節電の為

だそうで。

まあ実際の所、

仕事が無くてお金も無くて暇だから

が理由ではないか、と山崎は考えている。

「ちょっと旦那、風邪引きますってば」

横に座り込んで肩を叩くも返事は無し。

柔らかい銀髪がふわふわ揺れるだけ。

「まったくこの人は…」

溜め息混じりにそう呟いて、寝顔を見詰める。

『ほつぺた柔らかさうだなあ。唇も…』

山崎は不意にそんな事を考えてしまい、一人で焦る。

『旦那にときめくなんてそんな…』

でもこの胸の高鳴りは事実なワケで。

きよろきよろと回りを窺うと

『…誰も居ない』

ならばと意を決し、恐る恐る手を伸ばす。

かなり緊張しているのか、震えている指先。

ツン、とほっぺたをつつけば、ふにやりとした感触。

『や、柔らかい…』

山崎は再び回りを窺う。

『ごめんなさい旦那、後もう一回だけ…』

心の中で謝りながら、再び手を伸ばす。

『次は唇に……』

後少しで触れられる。

その時

「おい山崎、何してやがんでい」

急に後ろから声を掛けられ、飛び上がらんばかりに驚く。

恐る恐る振り向けば

「たっ隊長っ！」

真選組一番隊隊長、沖田総吾の姿が。

「何サボってやがんでい」

冷や汗だらだらの山崎。

沖田はガムを噛みながらアイマスク装着で、今正しくサボり中なのだが。

「すみませんでしたああ！」

ダッシュで逃げる山崎の背中を見遣り

「何だつてんだい……」

山崎が何かしてた場所を見る。

「あ、旦那」

山崎のヤロー、旦那に何してたんでい

そんな事を思いながら、銀時の横に座る。

『旦那の髪、ふわふわでさあ』

銀時は気持ち良さそうに眠っている。

『万事屋の節電なんて言って…土方コノヤローが旦那を傍に置いときたいだけじゃねえか』

そう思うと何だかムカついてきて、

ふわふわの髪に触れた。

『…やあらかい』

次は一房摘まんで香りを嗅ぐ。

『甘い…』

ふわふわ触りまくると辺りに甘い香りが漂う。

『いい匂いでさあ…』

「ん…」

触りすぎたのか、銀時が身動ぎした。

ドキリと鳴る胸。

しかしまた眠ってしまった様で。

『あーあ、こんな無防備な顔しちゃって、可愛いったらありやしねえ』

このまま銀時の髪を触りながら、自分も昼寝しようと思ったその時

「そおおおーおおおー！」

凄まじい殺気と共に、地の底から響くような声。

「ちっ、見付かつちまった」

そこには既に抜刀済みの鬼の姿が。

「総吾お前っ！銀時に何してやがるっっ！」

「あー、ホント土方さんは嫉妬深くていけねえや」

「なんだとお！」

今にも斬りかからんばかりの土方。

『旦那を触りまくるのはまた今度にしまさあ』

面倒が嫌いな総吾はヒラリと土方の脇をすり抜け、何処ぞやへ消え
て行った。

「ちっ…油断も隙もありやしねえ」

刀を鞘へ戻し、舌打ちする。

そして銀時の横に腰を下ろし柔らかい髪を撫で口付けを落とす、

『まあこんなに可愛けりやしょうがねえか…』

銀時が起きるまで、悪い虫が付かないよう見張ってるのだった。

恋文通信

- 恋文通信 -

もうすぐ日付が変わる夜更け。

1日の仕事を終えた土方十四朗は、漸く自室に戻って来た。

隊服を脱ぎ、スカーフを緩め煙草に火を付ける。

ふう、と煙を吐き出した時

「何だ？」

何かに気が付いた。

窓に何かが挟まっている。

朝はそんな物無かつたはずなのに

不思議に思い、手に取り見てみると

「…手紙、か」

真っ白な封筒に手紙が一枚。

中を開けば

『好きだ』

と、一言だけ。

封筒を見ても、宛名も名前も書いていない。

「ラブレターってヤツか？」

しかしまず第一に、誰からかが解らない。

「…どうしたものか」

暫く考え込み、筆を取った。

「これしか無えもんな」

次の日、土方が部屋に戻ると

「無くなつてやがる…」

実は昨日、土方は返事を書き、窓に挟んでいた。

まあ返事と言っても内容は

『名前くらい書いとけ』

だけなのだが。

ひょっとして、また書いたヤツが来るんじゃないかと思って挟んだのだが

「まさかホントに来るとはな」

何だか妙に可笑しくなり、その誰かも解らないヤツに親しみが沸いてきて。

少し笑って、暫く窓を眺めるのだった。

次の日、案の定窓に手紙が挟まっていた。

中には

『名前は言えねえ』

- 言えない、

つまり自分の知り合いの可能性が高いワケか。

土方はまた少し考え、筆を取るのだった。

次の日もその次の日も、手紙のやり取りは続いた。

毎日続くそのやり取りは、何時しか多忙な土方の癒しの一時となっていた。

『今日パチンコで勝った』

『犬の散歩に行った』

『団子が旨かった』

そんな一言日記みたいな内容の手紙。

それに土方は短い返事を書いた。

そんなやり取りが二週間ばかり続いたある日。

土方は1ヶ月ぶりのオフを貰った。

する事もないし、1日寝て過ごすか…

いや、まてよ…

オフの日、土方は1日部屋で過ごした。

何をするでも無く、しきりに窓の手紙を気にしながら。

もう日が暮れてきた頃

ザッザッ

足音が聞こえてきた。

土方は素早く窓の傍に移動し、身を隠す。

足音は部屋の前で止まり、

手紙が抜かれた瞬間、

土方は窓を開けた。

「ぎゃっ」

声を上げたのは、

土方の良く知る人物。

万事屋だった。

咄嗟に腕を掴み、逃げられないようにする。

「…お前だったのか」

なるほどな

土方が声を掛ければ、俯く万事屋。

「綺麗なねーちゃんじゃなくて悪かったな」

拗ねた様にそっぽを向き言う。

「でも、ばれちゃったし、これで文通ゴッコは終いだな」

少し笑って言う万事屋に

「ああ、そうだな」

と返す。

「じゃ、帰るから」

土方は腕を掴んだまま。

「ちょ、離してくんない？」

腕は離さず、話し掛ける。

「なあ、万事屋」

「何だよ」

「お前、文通だけの関係で満足か？」

「なっ、何を言っただ」

赤くなる万事屋の腕を引き寄せ

「ちょっ！？土方…？」

抱き締めた。

「俺は文通なんかじゃ足りねえよ」

耳元で言えば、びくりと震えるカラダ。

「だって…俺みたいナメなオッサン、土方もイヤだろ？」

腕の中から逃れようとがく万事屋を、もつと強く抱き締める。

「俺はイヤじゃない」

そう言えば急に大人しくなり

「…期待しちまうぞ」

ぼつりと呟く万事屋に

「ああ、存分に期待してくれ」

得意気に返し、赤く染まる頬に口付けを落とした。

雨恋

・雨恋・

今日は朝から雨。

ずっと部屋に籠りきりで事務作業をしていたから、気分転換に煙草を買いに出た。

傘をさして歩き、自販機で煙草を買い、何だかそのまま屯所へ戻る気には慣れず

「散歩でもするか」

屯所とは逆へと歩き出した。

周りは雨のせい、人が少ない。

傘に降る雨音を聞きながら、買ったばかりの煙草に火を付ける。

深く吸い込めば、雨でしっとりとした煙が肺を満たした。

「しかし良く降るな」

誰にともなく独り言がでる。

うろつろと、あても無く散歩していると、

「…アイツみたいだな」

何時もふらふらへらへらしているアイツ。

ああ、思い出したら頬が緩んてくる。

ふるふると首を振り、頬を引き締め、

『仕事中なのにこんな事じゃいけねえな』

部屋に溜まった書類の山を思い出し、屯所へ足を向けた。

屯所へ戻る途中、橋の上。

俺は足を止めた。

先には、橋に寄りかかり傘もささずに佇んでるヤツが。

白い着流しはしっとりと身体に張り付き、髪からは滴る滴。

冷えきっているのか肌は普段より白く、このまま雨に消えて仕舞い
そんな夢さで。

あまりの美しさに思わず息を呑んだ。

暫く見詰めていたが、どうやら向こうは俺に気付いて無いよう。

俺は足を進め、傘をさしてやる。

「どうしたんだ」

声を掛ければはっと俺を見て

「土方…」

小さく呟いた。

濡れた頬が透き通るようだ。

「何でもねえよ」

俯いて何時も調子で言うコイツにムカついて、

思わず白い頬を包み、口付けた。

手から滑り落ちる傘。

降る雨は俺とコイツを濡らし

「ど…したの、土方…」

白い息が空へ昇る。

抱き締める身体は冷たく凍え、少しでも暖まる様にきつく抱き締めた。

「お前こそどうしたんだ」

問い掛ければ

「雨の日は何だか寂しくなっちゃわない？此処に居れば誰か来るんじゃないかと思って…」

珍しく素直に答えるコイツ。

しかしこの橋の先には屯所しか無い。

通るのは真選組の人間だけだ。

「来たのが俺で、満足か？」

問えば少し笑って

「まあ不満は無いかな」

と深く胸に潜り込んできた。

「でもどうしたの土方くん。今日はヤケに優しいね」

胸の中からかう様な声。

「お前もヤケに素直じゃねえか」

それにニヤリと笑って言い返し、

見詰め合い、どちらともなくまた口付けて

「そりゃ雨も降るってもんだ」

二人で笑った。

賭けの勝者

- 賭けの勝者 -

土方とは、一回寝ただけだ。

別に土方がハジメテだった訳じゃないけど、忘れられない。

誘ってきたのは土方。

俺は土方が好きだったから、頷いた。

その後は何もない。

それ以来、前みたいに喧嘩することも罵り合うことも無くなった。

ホントに何もない関係。

あの日以来、俺の土方への想いは膨らむ一方で。

でも土方は町で会っても、目も合わせてくれない。

まあ、土方からしたらあの日の事は何かの気の迷いだっただろうけど

こんな気持ち抱えて暮らしていくのは、正直キツイ。

ある日

「まだ俺と付き合っ気にはなりませんか？」

前に依頼を受けた男と町で会った。

依頼を受けて以来、俺にまわりついてくる。

「なんねえよ」

何時もみたいに素っ気なく返すと、

「あ…」

前から土方が。

丁度いい。

そろそろ踏ん切り付けたかったから。

俺はちょっとした賭けに出た。

「…いいぜ、付き合っても」

「ホントですか!」

俺の手を握る、元依頼人。

少しでも俺の事を想うなら、何等かの反応があるはず。

その瞬間、土方が俺の横を通り過ぎた。

何時も通り

声を掛ける事も、見る事もせずに。

わざとデカイ声で会話してたから聞こえてるはず。

でも反応無しって事は

『つまり…そういう事か』

やっぱり言えばやっぱりなんだが。

自分で仕掛けといて傷付くなんて情けねえな。

横の元依頼人は俺の手を握り、歩き出す。

ぼんやり付いて行く俺。

何か話してるけど、全然耳に入らない。

ふと気付けば、人気の無い路地裏に連れ込まれていた。

あっ、と思う間も無く壁に押し付けられる身体。

迫る顔。

自分が仕掛けたんだ。

しょうがない。

でも…

「土方あ…」

思わず口を付いて出た名前。

ああ、涙まで出てきちゃったよ。

「ひじ…かたあ」

もう無理だ。

ギュツと目を瞑ると

「呼んだか？」

不意に、声がした。

見れば息を切らす土方の姿。

追い掛けて来たの？

土方が？

何で？

混乱する俺を土方は素早く引き寄せ、腕の中に収める。

そして

「何してんだバカ」

そう言っただけ抱き締めてくれた。

堪えてた涙は溢れだし

「だって、土方の事忘れようと思って…」

押さえてた想いも溢れだし。

「だって土方、俺の事、嫌いなんだろう？」

だから、だから…

土方は、涙で言葉が続かない俺を抱き締めたまま

「俺がいつ嫌いなんて言っただか？」

そして

「覚えとけ。俺は好きなヤツしか抱かねえよ」

そう言っただキスをくれた。

「でも、俺の事避けてたじゃん」

混乱したままの頭は土方の言葉も上手く理解出来ない。

「つまり俺の事、好きなの？嫌いななの？」

俺の問い掛けに土方は溜め息を付き、

「お前の事避けてたのは…顔見ちまうと、また抱きたくなるからだ。本当は想いを伝えてからと思っただのに、先に手え出しちまっただまねえ」

好きだ、銀時

耳元で囁かれ、また霞む視界。

「俺も好きだ、土方あ…」

やっぱ賭けてみて正解。

俺は土方に思いっきり抱き付いた。

「あの…俺は…」

「あ、もう帰っていいよ」「

子は鎧

「子は鎧」

土方は動揺していた。

かぶき町の橋の下で。

目の前には籠。

土方の手には、籠に入っていた手紙。

『もう疲れました。どなたかこの子をお願いします』

視線の先には、籠に入って無邪気に笑う赤子。

「だう」

「……」

赤子は土方に手を伸ばすが、土方は動かない。

否、動けない。

何故なら

『何この赤子！銀色なんスけど！ものっそい銀髪なんスけど！！こんな髪してるヤツは…』

「銀時ぐらいじゃねえかバツカヤロオオ！！！」

アイツ…！

浮気しやがったな…！

そして孕ませてトンスラしたってワケだな。…………

ホント最悪じゃねえかあのバカッ！

俺は赤子を抱き抱え、万事屋へと全力疾走した。

「銀時いい！なんじゃこりゃああああ！！！！」

スパーン、と勢い良く万事屋の扉を開くと

「ぎゃあああ！とつ十四朗おお！！」

今、まさに団子を頬張ろうとしていた銀時が、驚きの悲鳴を上げた。

「てめっ！何なんだこれは！」

「ばうー」

未だ驚いたままの銀時に赤子を見せる。

すると暫く俺と赤子を交互に見比べ、涙目になる銀時。

「…何だよ」

「十四朗がつ、俺の子を産んでくれたあああ！」

本気で感動している。

バカか？やっぱバカなの？

「この腐れ天パああ！お前俺の性別知ってんのか！？」

全力で罵るが

「十四朗…、俺の子を産んでくれてありがとう！」

涙目で優しく赤子ごと抱き締められ、何だかドキリとする。

変に暖かい銀時の胸。

腕の中にはすやすや眠る赤子。

………

いやいや、違うぞおお！

何この感動的な感じ！

俺産んでないからね！？

「ってかお前の浮気の産物だろうがああ！」

抱き付く銀時を引き剥がし、思いっきりぶん殴る。

「へばしいいっ！」

すっ転がる銀時。

頬を押さえて

「だ、だって…」

「言い訳しようってかぁ？」

「その目付きの悪さ、十四郎にそっくりだし、髪は俺にそっくりだから、何かの間違いで…産まれちゃったのかな、的な…」

「はぁ？」

言われて赤子をよくよく見てみると

…確かに、俺に似ている感じがしないでも無い。

「ね？ね？それに俺浮気してねえしね？俺はお前以外は抱けないからね？」

確かに、俺と銀時を足して2で割ったらこんな顔だろう。

「…ホントに浮気してねえんだな？」

「ホントだって。俺は十四郎だけだから」

そう言う銀時の目は真剣だ。

しょうがねえ

信じてやるか。

「…解った。じゃあこの子の親を探さねえとな。まあ面倒は山崎に見させるか」

俺がそう言つと

「見付かるまで二人で育てたらよくね？」

万事屋でさ

ニヤリと笑って、銀時は提案した。

…それから俺は万事屋に住み込んでいる。

仕事にはどうしても行かなければならない時だけ行く。

いつの間にか銀時が勝手に十五朗と名前を付けていた。

毎日十五朗の世話だ。

ミルクにおむつ、風呂に飯。

初めてで手慣れない俺を、銀時が意外な器用さでフォローする。

何だか悔しいから絶対言わねえが

『…いい旦那だ』

何て思ったりもする。

それから一週間ばかり経っただろうか。

漸く子育てに慣れてきた頃

ピンポーン

万事屋の呼び鈴がなった。

「もうあんな真似すんじゃないぞ」

「ありがとございました」

深々と頭を下げて歩いて行く女。

その腕の中には、十五郎。

…呼び鈴は依頼人だった。

赤ちゃんを探して欲しい、と。

「まあ、母親が一番だからなあ」

抱かれて行く十五郎の笑顔を見て呟く銀時は、何時もと変わらない顔で、

でも何処と無く寂しそうで。

「まあ、そうだろうな」

俺も腕の中が何だか寂しくて。

銀時の手を握って、ずっと見送った。

「ねえ、ホントに産んでくれない？」

「バカか」

朝の日課

- 朝の日課 -

- 銀時サイド

朝の6時

もう飲み屋も閉まり、かぶき町が一番静かな時間帯。

俺は窓を開け、通りを眺めている。

大きく欠伸をすれば、息が白く空へ昇った。

…そろそろ来るかな

耳を澄ませば、遠くから足音がする。

あ、来た。

胴着を着て、息を切らし走る土方。

俺はこの土方を見るのが好きだ。

前にたまたま早起した時に見掛けた姿。

冬の寒い朝に、首筋に光る汗と白い息がとても綺麗だった。

視線は鋭く何ともスティックな感じで。

ドキドキして、目が離せなかった。

それ以来、出来る限り早起してこっそり眺めている。

まあ、俺の朝の日課ってやつだ。

土方が万事屋の前に差し掛かる。

『ああ、今日も綺麗だ』

- 土方サイド

静かなかぶき町に俺の足音が響く。

こうやって走るのは俺の日課だ。

朝の澄んだ空気ですも心も引き締まる感じがして。

それに思わぬ楽しみも見付けたしな。

『…もうすぐ万事屋だな』

思えばふっと笑みが溢れる。

『アイツ、今日は起きてんのかな』

ある日、走っていると何かが光った。

万事屋の窓からだ。

目をやれば、アイツが窓を開けてぼんやりしている。

銀髪が朝日を受けてキラキラ輝いて

『綺麗だ…』

素直にそう思った。

だんだん万事屋が近づく。

その窓から見え隠れする銀髪。

『…あれで隠れてるつもりなのか？』

アイツは何時も少し隠れる様にして、通りを見ている。

いや、多分俺を。

まあ奥ゆかしいと言うか何と言うか。

もうすぐ万事屋の前だ。

『ちょっとイジワルしてやるか』

何て急に思い立ち、

俺は万事屋を通り過ぎる時、

窓を見上げ、こっそり見ているアイツと目を合わせてニヤリと笑ってやった。

隠れてるつもりだろうが残念だったな。

俺の方が一枚上手なんだよ。

まるでそう言わんばかりに。

- 銀時サイド

万事屋の前を通る土方は、俺を見てニヤリと笑った。

「っっ！」

急な展開に思わず隠れてしまう俺。

バレてた？

何時から？

ヤバイ恥ずかしいっ！

急に熱くなる顔。

だけどあんな得意気な顔で笑われたら…

「…何かムカつく」

チクシヨウ、明日はこっちから手を振ってやる。

そう思い、俺はまた布団へ潜り込んだ。

俺様彼氏

- 俺様彼氏 -

デカイ仕事が付き、一人で呑んだ帰り道

「ん…？」

ふらふらと千鳥足で歩く女を見付けた。

こんな夜中に一人で危ねえなあ

そんな事を思いながら眺めていたら、目が合った。

途端に逃げ出す女。

なんだよそりゃ

何だか腹が立ち、覚束無い足で逃げようとする女の腕を掴み

「何だ？俺の知り合いか？」

嫌がる顔を無理矢理掴み覗き込めば

…知ってる何てモンじゃねえよ

「ちっ、」

盛大に舌打ちする目の前の女。

いや、男か。

あの後、嫌がる女を引き摺るように近所の料亭に入った。

しかし…

「まさかお前とはなあ」

万事屋

からかう様に言えばまた舌打ちして、付け毛を筆取る。

「悪いかよ。ってか何で俺こんな所に連れて来られてんの？」

不貞腐れた顔で、綺麗に飾られている帯を緩め

「あー、女モンはキツくていけねえや」

大きく伸びをした。

「…お前こそ何でそんな格好してんだ」

さらけ出された胸元に視線をやらぬよう気を付けながら問えば

「んー、バイトかなあ」

片膝を立て、酒を煽りながら答える。

「バイト？…ああ、あの化け物屋敷か」

「そ、今月万事屋の依頼が少なくてねー」

って事は、コイツはあの格好で今まで男達にお酌していた訳か。

…ん？何だこの胸の苛立ちは。

「あれ？土方くん飲まないの？」

急に黙り込んだ俺に、万事屋が酒を差し出す。

二人きりの個室

向かい合って座る万事屋

淡く紅を引いた顔は薄暗い照明のせいにか妙に艶かしく。

緩め乱れた着物から白い太股が覗いて、溢れ出す色気に当てられくらくらしした。

「お前、… 仕事中まさかそんな霰もない格好でお酌とかしてねえだろうなあ」

俺の視線に気が付いたのか、慌てて着物を直す万事屋。

「っ！そんなの土方には関係ないじゃん」

… そうだ、

確かにコイツが何をしようと俺には関係無い筈だ。

だけど、こんな綺麗なコイツを他の男には見せたくない。

この気持ち…まるで嫉妬だな。

…ああ、成る程。

この気持ちはそういう訳か。

「…関係無くねえよ」

低く返せば、顔を赤らめ

「な、何だそれ。お前が俺の彼氏って言うなら解るけど…」

自分で言っておきながら、はっとして俯く万事屋。

見れば耳まで真っ赤に染まっている。

「彼氏じゃねえよ」

彼氏？

いや、そんなもんじゃ俺は納得しねえ。

「じゃあ…関係ないじゃん」

潤む瞳で俺を睨む万事屋。

バカか。

そんな顔したって可愛いだけなんだよ。

そんな事を思い、ふっと笑うと

「なっ、何だよ」

更に睨まれ。

そんな万事屋の手を無理矢理掴み

「バカか。俺はお前の、彼氏様だ」

様を強調して耳に低く囁き込めば

「っっ！」

目を丸くして驚く。

「不満か？じゃあ王子様でもいいぞ？」

更に掴んでいる手の甲に口付ければ。

「かつ勝手にすれば？」

強がる様が可愛くて、俺は熱い万事屋の頬に口付けた。

「じゃあもうあの店でバイトすんじゃないぞ」

「じゃあ毎月援助してよ、彼氏さ・ま」

「……………」

人の話は最後まで

- 人の話は最後まで -

法律とかそういった事は完全無視です。

銀時に呼び出された。

何時もの居酒屋。

大事な話があるとか何とかで。

一体何だ？

「親父、生二つ」

俺の前に座る銀時は、心なしかソワソワしている。

… まあコイツが落ち着き無いのは何時もの事なんだが。

チラチラ俺の方を窺う銀時。

何だよ一体。

「で…、何だ？話って」

悩むより聞いた方が早い。

そう思い、切り出した時

『まさか…別れ話とか』

気付いてしまった俺。

だってそうじゃね？

大体このパターンってそうじゃねえ？

やべえ、切り出さなきゃ良かった。

内心焦りまくってるが、顔に出さないよう心掛ける。

「んー、話して言うか…」

齒切れ悪い！

もう絶対そうだ。

何故だ？

あれ？俺何かした？

「実はさ、十四朗…」

「ちょおおつと待った！」

俺の声に驚いて言葉が止まる銀時。

「す、すまねえ…、こっちにも心の準備ってもんが…」

「あ、ああ、だよねー」

準備って！

自分で言っというて何だが

んなモン出来る訳ねええ！

やっぱり俺、銀時が好きなんだ。

こうなつて始めて解る。

今まで自分なりに大事にしてきたつもりだったが、全部一人よがりだったのかもなあ…。

そうだな…

やっぱり俺はコイツを失いたくねえよ。

今解つた。

俺は、銀時じゃないとダメだ。

「も、いい？」

銀時の問いに無言で頷く。

コイツが何て言つても絶対別れねえよ。

銀時は深く深呼吸をして、口を開く。

「じ、実はさ、十四朗…。俺と、そのー、何だ……………けっ……………」

「ぜってえイヤだ！」

「結婚して……、え………？」

「え………？」

何だった？

今コイツ何だった？

そして俺何だった？

……

「………」

「………」

「「ええええっ！？」」

「そのー…あー、…何かすまねえ…」

「あーもう！銀さん一世一代の大決心のプロポーズだったんですけどお」

あれから気まずい空気のまま、居酒屋を後にした俺達。

「……すまねえ」

もう一度謝ると、立ち止まる銀時。

「しゃーねえな。じゃもう一回やり直しね」

驚いて振り返ると

「結婚しよう、十四郎」

見た事無い程真面目な顔の銀時が。

お前…その顔反則だ。

撃ち抜かれちゃったじゃねえか。

「おう、貰われてやらあ」

見惚れてるのを気付かれない様に俯いて答える俺に、銀時はニヤリと笑い

「じゃあ十四郎は今から俺のモノね」

懐から何かを取り出し、俺の手を取る。

「…ありがとね、十四郎」

指にヒヤリとした感触。

指輪だ…。

ああ、陳腐だとは思うがこんな言葉しか出てこねえよ。

「…幸せにしねえと叩つ斬るからな」

その言葉に銀時は満足そうに頷き、

俺達は指を絡め家路に着いた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5161z/>

罪深く悩み多き我等

2012年1月13日20時56分発行